

唐辛子より辛い思い出…

～チャプレン室主催，韓国キャンプ～

柳 時京

立教大学チャプレン室は春と夏，休みの時期に幾つかのキャンプを設けている。国内と海外といった枠でそれぞれ独特な性格の四つのキャンプが行われている。今回はその中の「韓国キャンプ」についてご紹介したい。

私が2001年1月に立教大学に赴任した時，新学期に備えて一年間の計画を確認しプランを立てる折に，韓国キャンプの提案が出された。恐らく，韓国人の私の赴任をきっかけに構想されたことであるが，既にチャプレンに赴任していた韓国通の仲間香山チャプレンの存在も絡んでいただろう。前年までの海外キャンプが，3年間のサイクルを終了したこともあり，新しいキャンプとして「韓国キャンプ」が提案されたようだ。こうして始まった日韓キャンプは，去年まで2回，立教大学の学生と協定校の韓国聖公会大学の学生との協働キャンプというかたちで行われ，良い評価を得るようになってきた。この紙面を借りてご協力いただいたすべてのの方々に感謝申し上げたい。

この「韓国キャンプ」は，他のチャペルキャンプ同様，教室やキャンパス

だけでは体験できない様々な「学び」を，いつもとは違った「現場」で，いつもとは違った新しい仲間たちとの「出会い」を通して体感してみようというもので，「日本と韓国の歴史と今についての生きた出会いを通して体験するプログラム」という趣旨を持っている。このキャンプが始まったのは，いわゆる歴史教科書問題の影響で両国の関係が悪化した一昨年真夏であった。さらに多くの問題を乗り越えて，サッカーワールドカップの共同開催をきっかけに，両国の関係改善がみられ，空前の韓国ブームであった昨年にも第2回キャンプを開催した。真っ赤な韓国サポーターたちの様子を皆さんも覚えていることだろう。

しかし，三十六年におよぶ植民地支配という不幸な歴史の足跡は，いまだに両国の関係の中に根深い重いものとして残っている。だからこそ，このキャンプは，両国の若者同士が出会うべきであるという思いから企画されたものでもある。キャンプを通して，人間同士の出会いと信頼関係の構築によらなければ解決することの出来ない，大

切な課題へと一步を踏み出すことが目的だ。

第一回キャンプに参加したある学生の声がまだに耳に残っている。「日本で出会った韓国人留学生が『日本の韓国侵略史を知っている?』と尋ねられた。なぜそんな質問をしたのか、韓国に来てはじめて少しわかった。」キャンプでの貴重な経験を通して「両国間の交流が中断すれば、互いをふさぐ『壁』がさらに高くなるだろう。日本に帰っても友人達にこのままの今の雰囲気伝えたい」と。彼女はキャンプ以降、日韓大学生国際フォーラムに参加するなど、自分なりのスタイルで、キャンプを通して感じたことを活かそうとしている。これはまさにキャンプが望んだ一つの実りであろう。他のメンバーも個人的に行ったり来たりして、真の交流が続いているのも嬉しいことだ。

実りの多かった第一回・第二回に続き、今年も第三回「日韓共同キャンプ」を実施する予定である。日韓の大学生が農作業で共に汗を流し、共同生活の中で語り合い、時にはぶつかり合いながら出会い、学びあい、仲間としての信頼を築き上げるキャンプを目指している。

(今回のキャンプメンバーの感想文を、日本と韓国両方から一人ずつ選んで乗せておいた。詳しい情報はチャプレン室にある報告書を参考にしてほしい。)

ユ シギョン
(本学チャプレン)

<韓国のハンキョン新聞に取り上げられた記事>



한-일 대학생 공동농활 기일 도록 인칭 김희준 양시연 임희림에서 일본 동원대의 한 학생이 고추를 따고 있다. 양국의 정공회대와 연립대학 학생들의 공동농활은 한국과 일본 젊은이들이 함께 농촌활동을 하면서 도매 대안 이채를 높이고 두 나라의 비일치한 관계를 인식 하는 대화의 기회를 주기 위해 마련했다. 강원도 임정호 기자 nyopd@hani.co.kr

韓・日大学生共同農業体験

8月21日、午後仁川江華島の田舎で日本の立教大学の学生が唐辛子を摘み取っている。韓国の聖公会大学と立教大学の学生が、共同生活を通して共に農作業をしつつ、相互理解や両国の望ましい関係を模索する話し合いの機会として設けられた。

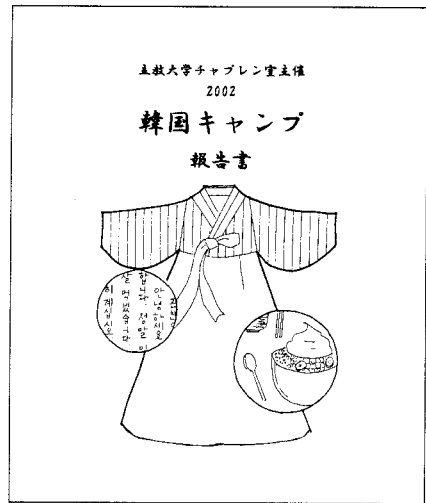
江華島/キムチョンヒョウ記者

感想1 鈴木愛美

(立教大学文学部英米文学科1年)

すごい10日間を過ごしてしまった気がする。あのキャンプ期間、私達より濃い10日間を過ごした人は他にいないんじゃないかってくらい。江華島は時間が流れるのがゆっくりで村の人にもマイペースだった。農作業中に突然ダンボールをひいてアジョシ（おじさん）たちが酒を飲み始めたとき仕事はもうしないのかと思った。でも、そんな大胆な休憩の時も、仕事をしているときも皆楽しそうで素敵だった。江華島の人って皆いい顔をしていた。何もない村だったから（？）人とたくさん話した。ふだんの他愛ない話、急にグローバルな話まで何でも。キャンプ三日目あたりに、（韓国側のメンバー）ヒョウンが「でも、私たちすごいね。会ったばかりなのにもうこんな話をしている」って言って、初めて感心してしまった。あまりに自然すぎて気づかなかったけれど、まだ会って間もなかった人だと。

もともと私は人と話すのがあまり得意じゃなかったから、このキャンプに不安を抱いていた。日本メンバーですらほぼ初対面なのに、外国の人と会った日から10日間一緒に暮らせるのか正直不安だった。でも、ほんとうに無意識のうちに素直に笑って、泣いて自



報告書表紙

分らしさを出せていた。皆と一緒にいられることがうれしくてずっとこのままでいられたらいいのにと考えた。

そんな風に幸せボケもしていたけれど、色々なところで日韓の悲惨な歴史も見た。江華島で昔日本に強制連行されたハラボジ（お爺さん）と話をすることがあり、体験を聞くことができた。体験そのものを聞くのも辛いものがあったけれど、私にはハラボジが日本語を話せる（読める）ということが悲しかった。それが日本のしたことを物語っているみたいで。西大門刑務所での息苦しさは忘れられない。でも、自分の目で見ることで良くなったと思っている。

もうキャンプから2ヶ月もたっているけど写真を見るとやっぱりみんなとてもいい顔をしている。すっかり平凡な生活に戻ってしまったけれど、次に

このメンバーが集まる時もこんな顔で会えたらな、と思う。みんなはスゴイ。色々な意味で。こんな変なメンバーと一緒にいられて幸せでした。どうもありがとう。

感想2 朴成鎮

(韓国聖公会大学校日本語日本学科3年)

初めて韓日キャンプについて話を耳にしたとき、参加したいという気持ちよりは、果たして参加したら何を得られるのだろうかという疑問を感じた。短い10日間の限定された期間のなかで、語学能力が向上するものだろうか？また国籍と文化が違う人同士、うまく生活していけるものだろうか？最終的に何を得られるのだろうか？いろいろ思い悩んだ。

しかし、そういう悩みは10日間のキャンプ生活を経るうちに、つまらない心配だったとすぐに分った。はじめはぎこちなかったけれど、一緒にキツイ仕事をしながら、一日一日生活を続けていくうちに、国籍や文化の違いという障壁はどこかに崩れ去っていった。互いにたくさん会話を交わしていった。いままで持っていた外国人に対する偏見や恐怖心が消えていった。もちろん、文化的な違いによって最初の頃不便な点があったわけではない。同じように日本の学生たちも不慣れな

韓国文化にうろたえていたようだし、いろいろ不便だったと思う。今回のキャンプではこのような文化的な違いを理解して、受け入れることができるよい経験になったので、意義があった。文化が違うためにおかしいとだけ思うよりは、なぜそういう違いが現れるのか、その文化を理解してやろうと努力してみることが大切ではないかと思った。韓日キャンプのような良い企画がこれからもずっと続いて拡大していったら、文化的な違いによって生じる偏見をたやすく克服することができるだろうと思う。

韓日キャンプは本当におもしろく、これまで経験できなかったことを経験してみることのできた本当に意味深い企画だったと思う。いま、韓日キャンプの時に撮った写真を見ると、いまだに体と心が江華島に行っているような錯覚に陥るときがときどきある。澄んだ大自然の息遣いの中で一緒に汗を流しながら、言葉はうまく通じなくても、一緒に笑い、過ごしたということ！どんなに素晴らしいことか！金をはらったってたやすく経験することができないくらいの良い機会だったと思う。

キャンプが終わってから2ヶ月が過ぎた今、韓日キャンプが僕にどんな影響を与えたのか考えて見た。結果はすごいものだった。まず、日本語会話に自信感がもてるようになった。以前は簡単な会話さえ日本人の前で話すのが大変だったけれど、今はそんな心配も



ソウルのサッカー競技場前にて（第2回）

なく自分の考えを表現できるようになった。非常に大きな助けになったようだ。日本語会話に対する自信と一緒に目標意識も持つようになった。聖公会大学と協定を結んでいる大学との間では、毎年留学生を交換する制度があることを知っていたけれど、自分の実力に自信がなくて、また成績の問題と留学という恐れ多さに、交換留学生について正面から考えてみるのができなかった。

しかし、今回韓日キャンプに行ったことによって、自分自身を振り返ってみる機会に恵まれ、自信と目標意識が持てるようになった。そして「今が自

分の人生の転換点だ」「交換留学生試験に、自分の人生のすべてをかけよう」と真剣に思い、交換留学生選抜試験の準備に全力を傾けた。その結果、目標としていた立教大学ではないけれど、日本の大阪にあるプール学院大学で2003年を過ごせることになった。（立教大学には別のキャンプメンバーの女子学生がくる予定だ。编者注）学業成績がよくなかったにもかかわらず、3分の1の競争を突破して正々堂々と選ばれたことを思うと、本当に夢のような話だ。今考えてみると、あの時は正気じゃないような感じだった。なにかに取り付かれたような感じは、僕の人

生の中で初めてじゃないかと思った。

韓日キャンプは、僕に自信と大きなチャンスを与えてくれたようだ。もし、韓日キャンプに行っていなかったら、今僕はなにをしているだろうか？考えたくもない。10日間の短い日程だったけれど、僕にとっては、本当に貴重な経験になったし、生涯忘れられない思い出として大切にするつもりだ。これからも韓日合同キャンプが毎年絶えることなく続いて、発展していったらと願っている。韓日キャンプのためにご尽力くださったすべてのスタッフの方々とすべての参加者に、遅くなりましたが、感謝の挨拶を申し上げます。

韓日キャンプ、ファイト！！